



TITLE:

渡歐日記(第五信)

AUTHOR(S):

寺田, 貞次

CITATION:

寺田, 貞次. 渡歐日記(第五信). 地球 1924, 2(6): 684-689

ISSUE DATE:

1924-12-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/182783>

RIGHT:

渡 歐 日 記

第二卷

第六號

六四

五二

(第五信)

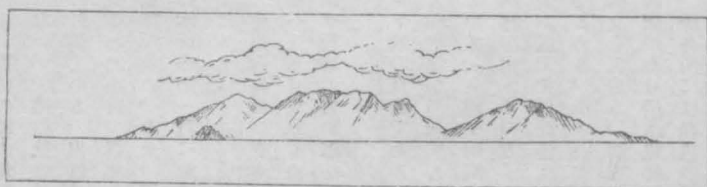
寺 田 貞 次

十三日、晴、昨日の見物に疲勞朝寝する船は六時新嘉坡港を出帆、起床した時既に海峡を西北に向て進んで居た、馬來の海岸に沿て走るのである、空幸に晴れ波も静かである、スマトラ島は勿論見えないが右舷の海岸には低く綠樹の茂る居るのが見える、定めし南洋邊で觀ると同様マングローブ樹であらう、遙に海拔二千餘呎の Gunung Pulai 山が眼にさまり左に Longbank 右に Fornostank を眺めつゝ進む、無線で總選舉の報が來た(東京十二日發船客宛)「高橋四十九の差にて當選危ぶまれたる高木、關、林田、岡崎、小川、海原、下岡、永井、尾崎、中野正剛、折原、堀田、磯次郎、山崎、若宮、當選す、中橋、井上角五郎、本川恒之、山田彌一、荒井泰二、副島義一、植竹、瀧、添田、澤田、岩田、田邊落選す」と語をうなる事例の如し、晝八十五度、疲勞の爲めか睡氣三時頃迄廢る、スコール襲來に眼を覺ますと、右舷に數多の小島が見える、陸岸も極く近くなつて居る、燈臺が接近して立て居る、注意して眺める、小島を過ぎるに船は陸から約四哩の邊で急に方向を變へ陸岸に向て進み約二哩の處で投錨した、マラツカ(Malacca)に着たのである、陸からの距離も遠く碇泊時間も少いので上陸は出来ぬ、船内か

ら眺めると、馬來の連山は餘り高くはない其の山の最重疊せる處はマラツカである、赤色屋根の洋館がだいふ並で見える、海岸には熱帯海岸特有のマングローブ樹が茂る、右手に丘陵が在り、丘上に寺院が聳えて見える。案内記にある古刹 St. Paul's church である葡萄牙の印度總督 Alfonso de Albuquerque の建立と記してある、港は十六世紀の初に葡萄牙人が始めて占領し十七世紀に入り和蘭之に代り十八世紀の始め(一八二四)英領になつた處で、此地方唯一の貿易港として知られたものであつたが英領になつて以來は彼南の競争にたへず衰微し今は人口僅に二萬餘の小都市になつてしまつた、歴史的に面白い處であるが上陸の出来ないのは遺憾であつた、なる程港は東に小島があつて其間僅に灣形をなすのみであり、海岸も遠淺で殆ど港としての價値を備へて居ない、彼南に壓倒されたのも當然で、今や海岸一艘の船をすら認めず、僅にコブラ、原料護謨並に錫積込の爲め暫く汽船の碇泊を見るに過ぎないのである、夕食に Restaurant を配布する、壹等乗客百二、三十名、邦人は殆んどマルセイユ上陸である、夜に入て積荷が尙済まない、マラツカ市街には電燈が光て來た、然し僅々三十餘燈に過ぎない、如何にも寒村に

ることが想像された、織田博士少々脚氣の氣味ありと聞く。

十四日、曇、船は荷役を終へ午前二時出帆、眼を覺すに既に航行中であつた、昨日と異り空少し曇り風も少しある、晝前に驟雨襲來濃霧となり馬來の連山も見えず午後二時頃迄は甚不愉快であつた、夕頃になり彼南も近づいたものか右舷に山脈を眺める様になり六時半頃には愈海岸に接近した。遠望した馬來の連山とは異りだいぶ雄大な景色である是が彼南島である、島は海岸に横ばり港は島の向ふ側に在るのである。水道は東部は水浅で大船の出入に適しないので船は島をまはり西水道から入るのであると何時の時代も同じ説明を聞かされる、注意して眺める夕暗に島影も段々物淋しく見える、又總選舉の報導が着した黨員の報知である勞働代表の鈴木文治氏が電文を讀み聞かしてくれた、其内彼南島西端の燈臺も見え小口博士と眺めて居たが十時頃になり愈々入港した、夜の事で地形が充分にわからない研究を明日に譲る、直に荷役が始まり終夜安眠を妨害された、



Penang島、此島の向て左岬をまわり港に入る（十四日夕六時頃ナガム）

序に積荷は重にゴブラである。

十五日、曇、早く起き港内を觀察する、兩側共にだいぶ高い山が聳えて居る、一方は馬來半島、一方は昨夜まはつて來た彼



彼南の棧橋

南島である島は面積百七平方哩と云ひ、小島ではあるが海拔二千七百呎のベンニルが聳えて居り綠樹深く茂り山麓は椰子樹林をなし彼南町其間に開け眺望壯觀である、香港の様に地形狹隘でないから山頂まで家屋建設の美觀はないが、港の狀態は香港同様で海岸に横ばる島を利用した港の好例である、出帆は正午と定まつたから上陸する、馬來人が見慣れぬ小舟で群集して来る支那ジャンクと異つて汚くないので氣持がよい、本永、徳岡氏等と共に勞働會議出席者、源、原田、鈴木氏等の一行に加はり見物する、九時のランチで上陸、彼南島に在る *Convent* と稱する處で棧橋を出ると郵便局を始め大建築物相並び香港や新嘉坡の様には羨らぬが相當の町の觀を備へて居り電車も自働車も走て居る。何處へ行くのか案内者に任せ數臺の自働車を並べて走る。

道路は香港、新嘉坡と同様アスファルト式の良道である、賑かな場所は僅かで、やがて綠樹鬱々たる住宅地を通過する、新嘉坡の様な立派なものもある、町はづれと申すべき椰子樹園の間土人の原始的生活を觀つゝ走る、椰子樹林を出ると四方うち開けた田園地になる、日本ならば水田と云ふ處ですが此邊は荳様のものを植えて居た、一院前に自働車をさめる、小さい支那風の御寺である門もなければ唯本堂のみ孤立して居る、清雲巖と書た額が掲げてある、傍に重建清雲巖碑記があり清水祖師云々と讀まれた、佛前の壇上、燈明臺の上、等各所には綠色の小蛇が無數に蟠り首をあげ舌を出して居る、知らずに入つた自分は思はず驚いた、蛇寺と云ふ由、如何なる緣起があるのかわからな

いが、遙々自働車を飛ばして參詣する價值を認め得ない、再乗車道をかへし再際限なく續いて居る椰子樹林を通ると電車の終點に達し自働車をさめた、之が有名な極樂寺である、寺は谷川を隔て山腹に建て居る、露流の奇岩風致に當み京都の高山寺に入る心持がした、一帯花崗岩質の山で其岩質を利用して建てたもので石を敷きつめた石階を登ると寺に達する、門を入ると露出の奇岩を應用して或は池水或は花園をつくり本堂、奥院と段々に高く建設してある、本堂の後一段高所に在る堂に登ると山麓一望の中に入り、見渡す限り綠豊かな椰子樹林で雨雲に霞んで見ゆる景色は恰も海洋の様に思はれる、流石はコブラの名産地と覺らしめた、寺は純支那式で却々立派であるが何分熱帯の事とて暑さ身にしむるので見物もそこ／＼に寺を下り再乗車、ケーブルカー驛前を通り競馬場畔を過ぎ支那人町を通過して、波止場に歸着した植物園等尙見るべき所もあると聞たが時間の都合で行かずランチを待たせ土人の小舟に乗て歸船した、南洋旅行でカメラに植さした昔を思ひ出し興にうたれた。要するに彼南は *Vallenty* 州の海岸に横ばる彼南島を應用した港で前述の如く東の水道は狹且水淺き爲め港は自然と西部に口を開き灣形を備へ香港の様に廣くはないけれども港としてマラツカの比ではない、早く開けたマラツカ港を凌いで馬來海峽殖民地中新嘉坡に到る港をなしたのは道理である。

今では馬來半島及び北部スマトラ産物の集散地としてコブラ護謨等の輸出盛である、住民は大部分支那人で經濟界も亦彼等の掌握する處となつて居る、*International trade developer* (1923

—には例を擧げて其勢力を示して居る。

豫定の如く正午出帆、一直線に西に向て進む。海峡を横切りスマトラ島の北岸を通りベンガル灣に出るのである、之から錫蘭島コロンボ迄は約五日かゝる、前途も迅速であるから晝食後は午睡、三時頃甲板に出た氣温八十七度西風涼しく吹いて居るが波は左程でない、彼南からコロンボ行の印度人が多數乗船した、船尾のデッキに天幕を張つて居る、老若男女様々のいでたちで、食物も各自携帯である、所謂デッキパツセンジャーである、黒い身體に汚れた綿布を纏ひ、平氣に横ばつて居る處はえも云はれぬ汚なさである、色こそ黒いが眼つき其他の様子は確に文明を以て盛えて居る歐人さ變りはない、等思ふと色々の感想にうたれざるを得なかつた。

十六日、晴、船はスマトラ島の北岸を走て居る、遙に陸岸を眺め、事が出来る、汽船二艘行き違ふた、スコールが尙襲來するにや咄れた空所々に暗雲を認める、食後例により遙ふ左舷にスマトラ富士の稱ある Golden Hill が見えしたので富士に縁で羽衣をうたふ、南西の風強く白波稍高い、船體の動搖をも感ずる、一等運轉手鎌田峻舟氏曰く此風は所謂 South West Monsoon であるから午後には少し強くなり動搖も尙はげしくなります、果せるかな漸々空模様變り出し曇雲立ち込め濕潤氣持の悪い事限りがない、案内記には右舷に Pulauch の小島等見える様に記いてあるが今は其望もなく物凄く雲霧の間隙かにスマトラ西北端を眺め得たのみでベンガル灣に差しかゝるさ海は次第に狂亂、船體動搖激烈、雨亦加つて來た、乗客一同或は船室に或はスモ

ーキングルームに或はソシアアルームに逃げ込む、三時頃になり雨も一時晴れ波も稍平いのでホット一息甲板に出て散歩など始む三時半の御茶にはおはぎが出る、石丸學士の前觸があつたので出て見る腹が大きくなつたので又散歩する、前方の暗雲見るゝ襲來強風豪雨が瀾船體盛に動く物凄き事限りなし、然しパロメーターは別に異變を示めさず夕頃には一層高く二十九インチ七寸に上つたから密かに安心したものゝよい氣持ではなかつた、最氣の毒なのは夫のデッキパツセンジャーで、此大驟雨に避くべき場所もなく大困りであつた、或る一人が本永博士に天幕一枚では雨滴の爲めに發病の憂がある、せめて天幕を二枚重ねてもらいたいと訴へたさうであるが、如何に未開のデッキパツセンジャーとは云へ此の大驟雨に入るべき場所もないのは如何にも同情に堪へない。

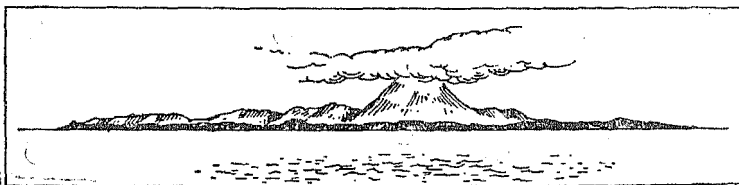
十七日、晴、朝起きて見ると昨日と異り空は晴氣味で風も稍風ざ波も稍しづまつて居る、晝にはスマトラ島から西約三百哩の邊を走て居る、コロンボ迄六百七十餘哩である、汽船一艘に出會た追手に帆かけの状態而走て居る之に反して本船は逆風の爲め潮流悪しく昨日の如き約四十哩も損を生じたさ、風の爲めに生ずる潮流の調査は航海者にさつては極めて重要で、段々よい圖面も出版されて居る船では日本水路部出版の潮流圖の他英米調査の Monthly Current chart を使用して居る、午後三時半睡から覺め甲板に出る、又一艘出會ふ、四本マストの船である機關長白く此式の船は日本には未だ見ない、空は晴れて居るが尙所々暗雲を残し風波も相當強い、然しスコールはスマトラ

近海を境として印度洋を西するに従て少くなる今日は一同も襲来しない、久しく拜しなかつた日没の景色を今日は美しく拜した、日没の光に照らされて暗雲の小片急速に飛ぶ景色却々見事に、いつしか東天高く明月のぼり、支那海上で見たり月日は早や満月に近く黒い煙に霞んで見ゆるも趣ある眺であつた、餘りの壯快に夕食後本永渡邊氏等と船首甲板に出て涼風にうたれつ、歌ふ、然し船床は流石に暑いから石橋博士の御教示に依り新嘉坡で求めた蓆蓆を用ふる、よく寝られた。

十八日、晴、空稍曇て居り風は相變らず強いが、波は差程でない、然しベンガル洋の真中まで紆曲大きく動搖何さなく不快である、十時から一等運轉手鎌田氏の案内で Chart room, Cabin, を見學す、船體から航海日記、備付書籍水路部案内、船名録、信號簿、海圖より經緯儀、羅針盤、セキスタントに至る迄詳細説明を聞く、書には北緯五度二十六分東經八十四度五十五分の處を走て居りコロンボへは三百五十餘哩、明日は着港の豫定となつた、夕食には冷麥が出た一同大喜、德富氏の「日本から日本へ」にも冷麥の記事が各所見受けたが日本人は冷麥が餘程嗜むものと見える、今夜十時頃船の出會つた。

十九日、晴、早朝船床のま、藤音法學士とキャンデー行を語る、氏は西本願寺關係者でもあり、キャンデーは錫蘭唯一の佛蹟だから是非行きたいとの事であつた、甲板に出る天氣よく波も比較的靜になつて居り右舷に一艘の船を見た、程なく地平線上薄雲の中幽に陸影を眺め、水天彷彿青一變の思ひをなしたが概もなく錫蘭島である事を確め愉快であつた。

早々朝食をすませ甲板に出た時は既に平坦な臺地の上に高峰の雲に掩はれて居るのが明かに見えて居た、最初に觀た岬は島の南端 Dondhead で、高峰は有名な Adams Peak であらう、案内記に佛足山と云ひ海拔七千三百五十二呎、山頂の岩上に一凹所あり、佛徒は之を釋迦の足跡とし、回教徒は人祖アダムの足跡とし、印度教徒は其神摩訶の足跡となし三教の信者四時登山す云々と書て居る者である、暫く遠ざかつて居たスコールが又襲來して來た、色々の感想に耽りつ、鳥影の變化して行く景色を眺め、午後の四時には陸岸に餘程接近、椰子樹の茂みをすら眺め得る様になつた、愈々上陸を準備なごする内に、壯大な防波堤もいつしか過ぎてコロンボ (Colombo) 港に着した、瞥見する處港内餘り大きくはない、海岸の左方には貯炭場、右方には大家高樓並立、香港の様な偉觀はないが相當な町だと思つた、乗客は大部分今日中



望遠島ノロイセ

にキャンデー(Kandy)に行き一泊の予定であり自分も之に加はる事にしたから着港早々上陸する、棧橋は香港にも新嘉坡にも見ない大規模のもので、此處迄来るに流石の支那人も居らず不潔でないから氣持よく出口の兩替店で少し兩替して出る。

錫蘭では通貨は留を單位とし下に仙があり百仙が一留に當り一留は邦貨の約五十五錢に相當する、一行は既定の自動車に分乗キャンデーに向ふ、キャンデーはコロンボ市の東北七十四哩の處に位し、汽車で約四時間、自動車でも三時間ばかり、八時頃でなければ到着し得ない、自分は例に依り德岡、小口、本永、渡邊四氏と同乗する、支那町類似的汚ない町を通り、キャンデー行鐵路を越すと愈々郊外に用道は相變らず立派で兩側の並樹はよく茂て居り、椰子樹パン樹等熱帶性植物が眼を引き各所散在の土人家屋も珍し氣に見える、馭者の印度人は道々英語で説明してくれる、土人の家毎に赤や青の色紙でキリコ燈籠を作つて竹先に吊し戸前を飾つて居り中には椰子の新芽でアーチを造り紙製の燈籠を吊して居るものもある、馭者の説明に依ると明後日が釋尊の降誕日であるからキャンデーでは御祭があり各戸燈籠に點火して之を祭るのであると、恰も日本の七夕が精霊祭の様な氣がした、キャンデーは海拔約二千呎の高地で、Kaduganawa と云ふ峠の處は絶景を間て居たが日が没したので唯屈曲せる急坂の危険を感じ或は谷間に無數の螢を眺め得たのみで何も觀る事が出来なんだ、峠を越すと地勢稍平坦になり暫く鐵道と並行して走り稍賑かな町を通る、何時しか東天月清く俄に道も明るくなり清涼な林間を走る爽快さなつた、やがて一

渡歐日記

橋を渡る道も廣くなりキャンデーの域に入つたのである賑かな町を通りクインズホテルに到着した、時將に八時を過ぎ早い車は既に着して休憩して居る向もあつた、ホテルは四階の立派な建物でホテルとして決して耻かしからぬものである、普通のホテル同様階下は休憩室、食堂、事務室、賣店あり、階上は寢室になつて居る、事務所で備付の帳簿に記名すると室の番號を定めてくれる、自分は渡邊誠氏と同室となつた、だいたい空腹を感じたので何は取りあえず夕食する、ボーイは眞黒な印度人である却々活潑に仕をする、日本ならば御給仕人は先づ自一のが普通だが流石は印度だと思ふた、休も暇もなく散歩する一體キャンデーと云ふのは前述の如く海拔二千呎の高所に位し森林深く茂り涼氣であり、湖沼等もあつて景色よく、日本で申すと輕井澤の様な處であり、且錫蘭島主の居城地で、佛牙等名蹟にも富んで居るので觀光の客四時程えなれと稱します、ホテルはキャンデー町中最景勝の地を占めて居りHotel Regentに濱し、佛牙寺も直ぐ近くに在ります、丁度釋尊降誕祭に當たので有名な象の行列が行はれて居た、此祭は年一回行ふので、先年我が皇太子殿下行啓の御時に之を御覽に供したものである、自分等は偶然來て此祭に會し得たのは云はゞ幸福であると思ふだ、寫眞や書籍で見ると通り裝飾せる大象に土人の酋長が裸で乗り、其中の一頭は釋尊の御厨子を負て居る、寺前の廣場には見物の土人で充満雜沓を極めて居る自分等も之に交て見物する、象の列は既に市内を廻つて歸着した處で最後に御厨子を負た象は御寺の石階を登り寺内に入つた、即ち釋尊御還幸と云ふのであらう、キャンデー湖畔に涼をさる一寸廣い湖沼で月の照て居る景色甚美しい、市内を少し散歩しホテルに歸つた、十二時にも近かつたのであらう、キャンデーに來て緩つくり休まうと思ふたのは間違で非常の疲勞を感じた。